

## 田村正勝教授古稀記念号発刊の辞

社会科学学会会長 西原博史

われわれが敬愛してやまない田村正勝先生は、今年めでたく古稀を迎えられ、本年3月をもって定年により早稲田大学を退職されることになりました。私たち社会科学学会のメンバーにとり、「社会科学の総合」理念の旗手であり続けた先生のいない「社会学」を想像することは困難でさえあり、とても寂しい思いを禁じ得ません。が、その一方で、先生が古稀を迎えるまでお元気に研究・教育にご活躍を続けてこられたことを心からお慶びいたしたく思います。

田村先生は、教育県として知られる長野は松本に1945年に生まれ、早稲田大学第一政治経済学部、同大学院経済学研究科を経て、1972年に創設間もない社会科学部に助手として着任しました。佐藤絃光先生、岡澤憲美先生とともにこの同期の助手3名はその後の社会科学部の中枢を形成していくこととなります。田村先生は1992～1994年に社会科学部長をお務めになり、当時の懸案であった大学院社会科学研究科の設置に向けて八面六臂の活躍をなさいました。地球社会論と政策科学論というこの研究科の二専攻体制の確立と、グローバリゼーションの新しい時代を迎える中での社会科学の総合理念の精緻化という点で、大部分は田村先生の筆になる研究科設置申請は、その後の学術院の発展において常に立ち返るべき中間まとめとしての役割を果たし続けることとなります。その後も早稲田大学評議員としての役職を通じ、合理的な大学運営の確立に貢献してこられました。

教育への貢献という意味では、社会科学部の看板講義であった「社会科学方法論」がまず思い出されます。履修自由度が高いこの学部であって長く数少ない選択必修科目であった社会科学方法論は、古今の社会科学諸理論に込められた理論家たちの思いを生き活きと描き出すとともに、それを踏まえて今後の社会科学が目指す

べき課題を明瞭に指し示すものであり、多くの社会科学部学生にとり、大学というものの知的な迫力に胸躍らせる気持ちを体験させるものだったことが知られています。夏休みに課される1万字レポートとともに、社会科学部のイニシエーション儀式を担ったわけですが、「いかん、勉強せねば、本を読まねば！」と学生たちに心の底から思わせる点で、極めて意義の大きいものでした。ご自身が設立に尽力した大学院社会科学研究科においても、先生の指導に接する者は、既存の理論枠組に留まらないスケールの大きな研究を繰り広げていくことになります。

このように田村先生は、大きな影響を受けた難波田春夫先生の業績を意識しながら、総合的な社会科学の樹立者としての名をほしいままにしていくことになりました。西欧近代が専門化・細分化の歴史であったこととの対比で、次の時代を作り出すための総合化にこそ時代の使命がある。この思いは、20世紀から21世紀の社会科学部・大学院社会科学研究科に学び、あるいは共に支えた者たちの中にしっかりと根を降ろし、次の時代に向かっても育ち続けていくことでしょう。

ご退職後も、経済政策分野において先生の叡智にすがろうとする多くの人々に囲まれ、能動的に時代と関わり続け、大切な観点を発信し続けてくださるものと信じておりますが、いつまでもお元気でいらっしゃいますことをお祈りし、今後とも社会科学総合学術院の発展のためにご指導ご鞭撻をお願いしながら、長らくにわたってのご苦勞に対してお礼を申し上げ、本記念号の発刊の辞といたします。

## 岡澤憲芙教授古稀記念号発刊の辞

社会科学学会会長 西原 博史

われわれが敬愛してやまない岡澤憲芙先生は、今年めでたく古稀を迎えられ、本年3月をもって定年により早稲田大学を退職されることになりました。私たち社会科学学会のメンバーにとり、先生のいない「社会学」をイメージすることは困難であり、とても寂しい思いを禁じ得ません。が、その一方で、先生が大学行政へのご尽力を惜しまぬかたわら、古稀を迎えるまでお元気に研究・教育にご活躍を続けてこられたことを心からお慶びいたしたく思います。

岡澤先生は、1972年に創設間もない社会科学部に助手として着任して以降、1988年に前任者逝去に伴う学部長代行、1990～92年社会科学部長を務められ、大学院社会科学研究所の設置に向かう社会科学部にとって大事な局面において舵を取り、社会科学部の名を世に知らしめるにあたって大きな貢献を果たしてこられました。その後、早稲田大学図書館長、理事、常任理事・副総長の要職を通じ、またその後も早稲田大学ヨーロッパセンター館長、日欧研究機構長などを務めることにより、大学本体の行政にも多くの労を割いてこられました。特に常任理事時代は国際担当として世界に向けて早稲田の名を高めることに寄与してこられました。たとえば、学部教務主任時代に全国自己推薦入学試験という、今でこそ公募推薦入試制度として定着しているものの、当時としては非常識にさえ思えた入試制度を考案し、地方を回って宣伝し、優れた受験生を集めてくる、その斬新なアイデアと実行力に現れるような先を見通す力でもって、後進たちに多くの制度的遺産を伝えてくれています。

このように大学行政にも、高い意欲と熱意を注ぎ込んできましたが、やはり、岡澤先生の本領は比較政治学者・政党論研究者・北欧地域研究スペシャリストとし

ての学問的な活動の中で発揮され続けることとなります。「実験ができない社会科学にあって、比較こそが、自らの理解の正確さを保つために必要な視座なんや、忘れちゃアカンぞ！」と熱く語る姿は、後進に多くの影響を刻み込んでいます。自身の立ち位置に対する反省の契機としての意義を負うがゆえに、単に良い所取りするための基礎資料としてでなく、正確で重層的な構造把握の対象として比較対象国の制度と誠実に向き合う方法が特徴的であったように思われます。だからこそ、スウェーデン政府関係者をして「日本にわが国は二人の大使を置いている、一人は大使館に、一人は早稲田大学に」と言わしめるだけの信頼を勝ち得ていたわけです。

1944年に上海に生まれ、「引揚げ者」として幼少時代を送ったからかもしれませんが、岡澤先生の政治学には、常に社会の辺境に追いやられようとする者に対しても注がれる優しい目があり、その思いをも掬い上げられるシステム構築への視座が組み込まれていたように思われます。とてつもない博識でありながら、それに留まらない誠実な学究者（ドイツ語でder Gelehrteという言葉が適切でしょう）としてのお姿に、社会科学部で教えを受け、あるいは大学院社会科学研究科で指導を受けた者、そして私どものように身近でお姿を見てきた者に、大きな影響を残しておられます。

ご退職後も、持ち前の知的好奇心に導かれて世界を飛び回りつつ、様々な形で新しい認識とアイデアを生み出し続けていただけるものと信じておりますが、いつまでもお元気でいらっしゃいますことをお祈りし、今後とも社会科学総合学院の発展のためにご指導ご鞭撻をお願いしながら、長らくにわたってのご苦勞に対してお礼を申し上げ、本記念号の発刊の辞といたします。

## 辻義昌教授古稀記念号発刊の辞

社会科学学会会長 西原博史

われわれが敬愛してやまない辻義昌先生は、今年めでたく古稀を迎えられ、本年3月をもって定年により早稲田大学を退職されることになりました。私たち社会科学学会のメンバーにとり、実証的な経済史学の安定した方法論を示し続けた先生のいない「社会学」を想像することは困難でさえあり、とても寂しい思いを禁じ得ません。が、その一方で、先生が古稀を迎えるまでお元気に研究・教育にご活躍を続けてこられたことを心からお慶びいたしたく思います。

辻先生は、1944年に名古屋に生まれ、横浜国立大学経済学部、東京大学大学院経済学研究科に学んだ後、1976年に社会科学部助手として早稲田大学の門をくぐり、その後、同学部専任講師、助教授、教授と昇進を遂げてきました。主たる担当科目は、学部において経済学、労働市場論など、大学院社会科学研究科において比較経済・労働問題論などでした。中でも辻先生の指導するゼミナールは、学部の早い段階から、常識的な理解に満足せずに、テキストと真剣に向き合いながら自分で納得できる高みを目指せる姿勢を学生と共有することを旨としておられ、厳しくも充実度と満足度の高い学究的な場として知られていました。

ご自身は、特に労働というキーワードを軸としたソビエト連邦・ロシア現代経済史の研究者として知られ、日本語、英語、そしてロシア語による重要な業績を積み重ねてきています。1987～89年はオックスフォードで在外研究期間を過ごし、ソビエト連邦の末期をイギリスの視点から観察する機会を持って、その後の重要な研究発信の手がかりをつかんでおられました。1998年からは、モスクワ大学において客員教授に招かれ、ソビエト連邦・ロシア現代経済史の外から見た場合の視点を本国で共有し、相互に発展できる環境醸成に大きく貢献してきています。

そして、教授会における辻先生は、問題が紛糾しかかった時に、クリアな論点整理の視点を提供するとともに、たとえば執行部提案が抱え込む体系的帰結を示しながら「それでいいの？ 本当に？ よく考えないと」と問う厳しい討論参加者としても多くの同僚の記憶に強い印象を残しています。決して感情的な反対論を唱えるようなことはせず、しかし組織を運営する時に目指すべきステイクホルダーに対する誠実な説明責任を体現するという点で理想を値引きすることもなく、目指すべき合理性のラインを常に意識する発言は、会議に集う皆の背筋を伸ばさせるものでした。社会科学総合学術院において、これまで教授会が教授会らしい知的で合理的な組織運営の場であることができてきたのも、黙っている時でさえ各方面の提案に質を求める辻先生が存在に大きく規定されてのことであったように思われます。

多様な言語を操り、専門の、そしてその背景を成す幅広い情報を含む書物に埋もれて過ごすことに幸せを感じていらしたように思われる辻先生の在職時のお姿からすれば、ご退職後も、そのまま読書三昧を続けられるのではないかと想像しています。スピーディーな時代の変化の中でもすれば埋もれてしまう、しかし大きな時代の流れの中では極めて貴重で教訓の多い過程に光を当てるような研究成果が、今後も先生の手によって生み出されていくものと信じておりますが、いつまでもお元気でいらっしゃいますことをお祈りし、今後とも社会科学総合学術院の発展のためにご指導ご鞭撻をお願いしながら、長らくにわたってのご苦勞に対してお礼を申し上げ、本記念号の発刊の辞といたします。